

内水面域振興活動推進事業（海産稚アユ分布調査）

中西尚文・藤田弘一・小河義秀

目的

本県の放流アユは疾病や安定供給等の問題を抱える琵琶湖産アユや県外の高産稚アユが多くを占めている。しかし本県の沿岸域でも稚アユは分布し、より詳細な知見を得ることで放流用種苗として有効活用できる可能性がある。そこで、海産稚アユの分布・出現状況とその採集漁具について調査研究を行う。

方法

1. 採集調査

稚アユの採集は、伊勢湾北中部の砂浜海岸である高松（川越町）、吉崎（四日市市）、白子（鈴鹿市）、白塚（津市）、大淀（明和町）の砕波帯において、1～2月に月1回行った（図1）。採集には砕波帯ネット（高さ1m×幅4m、目合い1mm、中央部は袋状）を用い、水深1m以浅の砕波帯を岸に平行に曳網した。曳網距離は1回を50mとし2回実施した。採集した稚魚は10%海水ホルマリンにて数時間固定後、99.5%エタノールにて保存した。計数や計測はエタノールによる収縮が終わる1ヶ月以上を経過した後に実施し、曳網ごとに1～100尾の標準体長をノギスを用いて測定した。

2. 採集漁具・漁法調査

2007年2月に和歌山県北部で、2008年2月に静岡県浜名湖周辺で行った視察情報に、現在本県で実施されている試験漁獲および規模を拡大した漁獲における問題点を整理した。

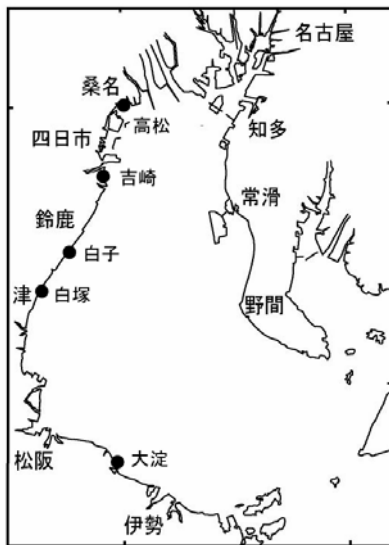


図1. 採集調査側点図

結果および考察

1. 採集調査

砕波帯ネットによる採集結果を表1に示した。2ヶ月間で199尾採集された。1,2月とも白子海岸で最も多く採捕することができた。調査月・調査地点・曳網回ごとの曳網距離当たりの採集尾数は1月で0～1.0尾/m、2月で0～0.9尾/mであった。稚魚の体長を図2に示した。採集した稚魚の体長は、9.9～38.6mmの範囲であった。なお、体サイズの大きな稚魚は逃避により砕波帯ネットでは採捕できないため、本調査にて採捕できた群れの体サイズは本来生息する群れより小さいと考えられる。

3年間の当調査より、安定した採捕は白子海岸が最も期待できると考えられた。

表1. 砕波帯ネットによる採集結果（尾数）

月	曳網回	調査海岸	高松	吉崎	白子	白塚	大淀
1月	1回目		0	5	0	2	0
	2回目		0	2	49	27	0
	合計		0	7	49	29	0
2月	1回目		16	0	43	8	0
	2回目		3	0	42	2	0
	合計		19	0	85	10	0

2. 採集漁具・漁法調査

近年、三重県内水面漁連が試験的に稚アユ漁獲を依頼している白子地区では、例年2月中旬以降に港内で敷網を使い採捕し、陸上水槽で蓄養している。漁具は和歌山県北部の敷網と類似し、蓄養は静岡県浜名湖周辺でも採用されている陸上水槽であるため技術的な問題は無い。しかし安定して漁獲されない要因は、操業形態に由来した漁獲意欲にあると考えられる。この時期は従来から営んでいるイカナゴ漁の準備やクロノリ養殖の片付けに忙しく、積極的に操業できないのが現状である。なお、昨年度の同報告では操業時期を1月以前に早めることも提案したが、積極的に進められた様子はない。

河口付近における稚アユの漁獲については、その近隣の内水面漁協から強い反対を受けることが推測できる。天然遡上アユに期待する内水面漁協が近隣に無い白子海岸付近では、現状の試験漁獲程度ではこのような反対運動も起きにくい。しかし漁獲目標量を増やすなど規模を拡大する際は、他県を含め他の内水面漁協等との調整が必要になる。事実、需給調整や漁獲を円滑に進めるため、和歌山県では県漁連が、静岡県では県内水面漁連が事務局となり協議会や委員会を設置している。本県の放流ア

ユの由来は琵琶湖産が多くを占める。今後、本県の海産稚アユの要望が増す場合は、県内水面漁連を中心とした各種調整が必要になることが考えられる。

関連報文

和歌山県北部および静岡県浜名湖における海産稚アユの漁獲と三重県における海産稚アユ漁獲の可能性，三重県水産研究所鈴鹿水産研究室，2009年3月

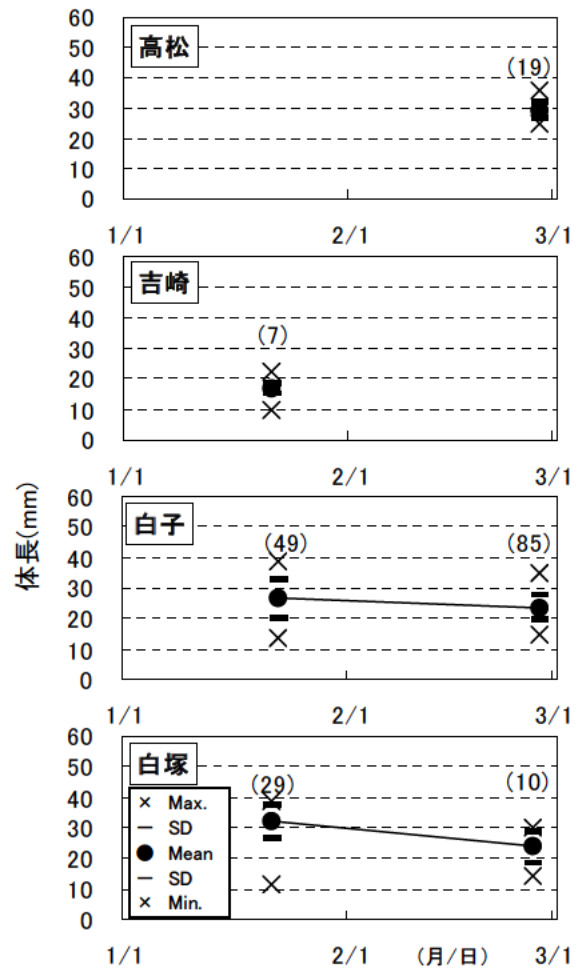


図 2. 体長組成の推移
(平均, ±SD, 最大, 最小, () は尾数)